【登場人物】

・ロバート・クロス
主人公。貧民街の出身だったが、自身の美貌を使い売春で、ヴァルナ社の社長に昇りつめる。

・イーサン・カーター
ロバートに育てられた少年。運動神経がよく射撃と手芸が得意。暗殺業を始　める。勉強はすこぶる苦手。

・アン
ロバートが恋する女性。ブラフマー街の貧しい娼婦。

・アーノルド・リズリー
ヴァルナ社の前社長。ロバートに性的奉仕をさせていたが、心筋梗塞で急逝する。

・ジェフェリー・ボールドウィン
ロバートの部下兼お目付け役。

・マッテオ・ラモリーノ
ロバートの部下。イタリアからの移民。

・中島昌義
ロバートの部下。日本からの移民。

・ナヒマナ
ロバートの部下。ネイティブアメリカンの生まれの女性。

・アレック・バルダーソン
ロバートの友人。ロマンチストで作詩が得意。

・ジョン・ヘイスティングス
ロバートの友人。やんちゃな性格。

・パトリック・オーウェル
ロバートの友人。教会の一人息子。優しく面倒見がいい。

・ヴァイオレット・ディケンズ
シヴァ街の高級娼婦。ロバートの愛人の振りをする。

・ヴァレリア・デュヴィーヌ
シヴァ街の娼婦見習いの美少女。イーサンの担当娼婦として将来が決まっている。

・グレース・マクファーレン
没落貴族の令嬢。気位の高い美少女でロバートやリズリーを毛嫌いする。

・ロレンス・エベレット
製薬会社の若手社長でグレースの婚約者。ロバートにその才能を見込まれ、毒ガス作りに利用される。

【重要用語】

・シヴァ街

ネオンライトタウンの三つの区分の内、最も豊かな街。現在、ロバートとイーサンが暮らす。

・ヴィシュヌ街

三区分の内の真ん中。中間階級の人々の住む街。

・ブラフマー街

ネオンライトタウンの最底辺に位置するスラム街。ロバート、イーサンの出身地。

・ヴァルナ社

ネオンライトタウンで最も力のある会社。マフィアと癒着があり、悪い評判が絶えない。

【前回の粗筋】

貧しい生まれのロバートは、恋人のアンやたった一人の家族のイーサンにむくいようと、ネオンライトタウンのトップを目指して奮闘していた。ヴァルナ社社長のリズリーを廃し、遺言書を偽造することで社長に就任することをロバートは計画するが、ある夜リズリーは心筋梗塞で急逝してしまう。呆気なくリズリーが死んだことにロバートは戸惑うが、やがて偽造したものではない、本物のリズリーの遺言により、ロバートは社長に就任する。リズリーが最初から自分を後継者に指名していたことにも、ロバートは驚くが、社長という新たな職務を全うすることを決意する。

年々激化する第一次世界大戦を利用した新ビジネスに舵を切るために、ロバートはヴァルナ社を一気にグローバル化させる。語学堪能な新社員を味方につけ、彼は鉄鋼の輸出で巨額な富を築く。そんな中、ヴァルナ社の伝統に則り、ロバートは女の愛人を作ることを強いられる。恋人アンを思う彼は異性の愛人を作ることに辟易するが、高級娼婦ヴァイオレットを結局は気に入り、彼女に愛人の振りを頼むことになる。

段々社長として大成していくロバートであったが、やがて鉄鋼貿易だけでは持続的に利益を出せなくなる。行き詰ったロバートは、ドイツで使用された毒ガスを製造し、輸出することを思いつく。毒ガスを生成に協力してくれる人物をロバートは探すが、ロレンス・エベレットという男に目をつける。しかし、彼が昔心惹かれた美少女グレースの婚約者だと知ると、自分の計画に彼女を巻き込むことに苦悩する。

しかし、ある日エベレットに哀れみの言葉をかけられたロバートは、彼に向かって激昂する。怒りと絶望のあまり、ロバートはエベレットを性的に誘惑し、関係を結んでしまう。

ブルーアイズヒーロー5
ロバート・マイ・スイート

作：こだま
挿絵：市川司幸

エベレットとはあれから何度も会った。あれだけのことをして、打っ棄るわけにはいかなかったから当然だ。あれだけのことをしたんだ。私は代金をもらわなければいけなかった。ただ、初めて寝た日は、そんな代価のことなんてはっきり考えてなどいなかった。

「考えてくれたか？」

私は外套を彼の部屋で脱ぐと、開口一番にそう言う。返事はいつも返ってこない。

「ロバート。無理だよ……。これ以上、僕を人でなしにしないでくれ」

エベレットは小さくそう言う。その小さな声に苛立って、私は頭を掻きながら怒鳴った。

「ああ、もう！　いい加減にしろ！　お前は一晩一万ドルの値打ちはある俺の体を無料で好き勝手してんだ！　そろそろ清算してくれなきゃ、こっちだってやってらんねえよ！　ええ！　何が人でなしだってんだ、今まで家畜扱いされたことなんかてんでないくせによ！　いい加減、覚悟を決めやがれ！　切羽詰まってんだよ、こっちは！」

「金ならいくらでも払う！　何万ドルだろうが払ってやる！　これで満足だろう！　だからもうやめてくれ！　聞きたくもない、毒ガスなんて言葉は！」

エベレットの怒鳴る様子は嫌な感じだった。下卑ていた。自分を買ったどんな男よりも下品だった。

「は、困っている人を助けたいだの何だのほざいてた方が結局はお金で解決ですか。まあ、落ちたもんだ。でもね、ミスター・エベレット。俺はあんたの金じゃなくて頭脳で支払ってもらいたいんだよ。いいか？　きちんと頭脳というお代を頂けないなら、一体どうなるかはお分かりでしょうね」

「クソったれ！」

エベレットが自分の膝を拳で殴った。ぼろぼろと涙が下瞼を零れ落ちていった。

「俺が一体何をしたよ！　一体どんな悪いことをしたよ！」

「馬鹿だな。全てはお前が若くて、金持ちで、高学歴なのが運の尽きなのさ」

最低なことを言っている自覚はあった。

なのに、なぜか無性に残忍な気持ちになった。どんなひどいことでも平気で口にできた。

「お前が俺と寝た理由は分かってる。だけどな、何も差し出さずにいられると思ったら大間違いだからな。みんなそうしてきたんだ。俺も、俺を買ってきた男も、みんな何か捨てて来たんだ。お前は知らなかったんだ。欲しいものがどれだけ小さかろうと、その全てに価値があるってことをな」

一番憂鬱なのは、エベレットの家からヴァルナ社に戻る時だった。散々エベレットにひどいことを言い散らした後、車の窓に額をつけてタイヤの揺れに身を任せた。会社に帰ってから、誰にも会いたくなかった。

仕事部屋の扉を開ければ、部下が私を出迎える。いい加減に仕事の約束は取り付けたのか、まだなのか、という視線を笑顔の奥に彼らは隠している。そんな彼らに私は何度も言うのだ。「今回もやつは腰を上げない。だから怒鳴りつけてやったさ」。うんざりだった。エベレットに優しくすれば、きっと見下されるだろう。誰からもだ。どんなに親しい人、そうジェフェリーからも。だってこれは仕事なのだ。お金が、生活が、責任がかかっているのだ。

エベレットがグレースをあれほど愛しながらも私に負けた理由は、ちゃんと分かっていた。確かに彼のグレースへの愛は本物だった。疑いようもなかった。でも彼は若い。私よりも少し年上くらい。若いのだ。生まれながらに彼は恵まれていた。進むべき道が分かっていた。愛するグレースにもその道は望まれた。だがそれは幸福そうに見えて、一種の呪いだった。死ぬまで解けない呪い。彼は結婚証明書にサインするとき、グレースとの子供を抱くとき、こう胸の内で叫ぶのだ。(ああ、これが死ぬまで！　一生！　これが！)いや、今までだって叫んできたはずなんだ。若い喉で叫んで来た。(一生！　死ぬまで！)若い喉にこの言葉は辛かった。私に触れた時、私の肌はさぞ彼の若い肌に震えるような喜びを与えたことだろう。ぞくぞくしたことだろう。少しだけ、喜びが胸を打ったことだろう。ただ、本当に少しだけ。結局彼は、世間を知らないおかげで、どんなに小さな者にも価値があることを知らなかった、理解できなかった。ほんの少しのつもりが、どれだけの代償を要していたか、分かっていなかった。

仕事部屋に戻るとイーサンがいた。彼一人だけ、私のデスクの上にぼんやりと座っていた。

「他のみんなはどうした？　ジェフェリーと午後の予定について話したいんだが……」

「みんな一旦事務室に行ったよ。ちょっと休憩させてあげたら？」

イーサンが静かに答えた。虚ろな目だった。

私はデスクに向かって椅子に腰かけた。

「机の上に座らないの、イーサン」

彼は大人しく従った。虚ろだった顔がほんの少し和らいでいた。小さな子供を注意

するような私の口ぶりが嬉しかったのだろうか。

　イーサンはジェフェリーのデスクから、小さな花柄の美しい小箱を取って私に渡した。中には美味しそうなハート形のクッキーがぎっしりと詰まっていた。

「差し入れ。ジェフェリーの奥さんが焼いてくれたんだって。呼ばれたら？」

「お菓子は控えてるんだけど、俺」

「いいじゃないの、頂き物なんだから。ちょっとくらい食べたってニキビになんかなるもんか。それに、せっかく貰ったのに食べない方が間違ってる」

　それなら、と私は一つ取って口に入れた。この所碌に食べていなかったせいで、甘い味が嬉しかった。一つ食べると急激にお腹が空いて、もう一つもう一つとパクパクやってしまった。肌荒れしないか気になったが、すぐに「頂き物なんだから構うもんか」と開き直った。私が食べる様子を、イーサンは暖かな愛情を目にたたえて見つめていた。

　しかし、食欲は突然去った。分かってしまったのだ。エベレットをやる気にさせる魔法の言葉が。クッキーを勧めるイーサンとのやり取りから導き出せてしまった。それが嫌だった。もっと別の方法で分かっていたら、こんなにも嫌な気持ちにはならなかった。イーサンの言葉から知ってしまったのが、悲しかった。

　顔を上げると、イーサンももう笑わなかった。

「戦争もいつまでも長いね」

　夜更けの寝室で、私は隣のエベレットに何気なしを装って話しかけた。

「ああ。全く嫌なものだよ」

　エベレットは私の腰を撫でさする手を止めて言った。それを聞いて私はすでに外交の電話のことを考え始めた。

「やっぱり君は生粋の戦争嫌いのようだね」

「何度も言ってるじゃないか、ロバート。いい所なんてあるもんか。あれはただの大量殺人行為さ。ドイツやイギリスで一体何人の子供達が帰らない兄や父や、焼けた家を思って泣いているか、想像するだけで辛いよ、僕は」

　そう語るエベレットは、ずっと前に夜会であったエベレットだった。私が好きなグレースが愛してやまないエベレットだった。

「俺だっていやだよ、本当は」

　そっと、自然な様子で彼の手に触れた。荒っぽい太陽の香りが出ていたと思う。

「別に俺だってね、何が何でも敵を殺したいと思ってるわけじゃない。戦争が好きで仕事をしてるんじゃないんだ。むしろ俺は、早く終わってほしいと思ってるよ」

「君がか？」

「ああ。だってもし戦争が長引いたら、うちも参戦することになるかもしれない」

　この文句は前から組み立てていたものだった。しかし、こういった時、なぜかこの場には全く関係のない、パトリック、ジョン、そしてアレックのことを思い出してしまった。

「友達がいるんだ」

つい、ぽろっと言ってしまった。

「もし参戦なんてことになったら、きっとみんな兵隊に取られてしまう……。それが怖いんだ」

「そうだったのか」

　エベレットの労わるような声を受けて、私は慌てて首を振った。いけない、早く本題に入らなければ。

「だから、反戦主義なのは俺も君も同じさ。戦争なんて早く終わればいいと思っている」

　私は素早く寝台から降り、脱いだままの服をするすると身に着けた。

「ならどうしたら戦争を早く終結させられるか」

　ジャケットのボタンを全てかけて、裸身のエベレットを見下ろした。

「君の師匠はすでに答えを出していた。私もいたく感銘を受けたよ」

「どういうことだ?」

　エベレットがそっと上目遣いに私を見た。ぽっちりとした大きな目だった。

「エベレット。君は私が毒ガス作りを提案したのは、金儲けのためだと思っているらしいな。しかし、君は大きな思い違いをしているよ。戦争を早期終了させる。そのために必要なのが毒ガスなんだ」

「は?」

　エベレットの頬が強張った。しかし、その奥の血管は、はち切れんばかりに膨張しているのが分かった。

「いいかい。戦争は決着がつけば終わる。だから終戦に必要なのは勝利だ。連合国を一刻も早く勝利させる。そのためには、膠着している戦況を打破する新しい武器がいるんだ。毒ガスはそのためのものだよ」

「じゃあ……殺人兵器が人を救うのか」

「その通り。考えてみてくれ、エベレット。このまま何もせず戦火を遠くから眺めるだけでは、何も変わらない。そうすればやがて火の粉はここまで降りかかってくる。アメリカも戦場に向かう時が来てしまうんだ。そうなれば、銃を握ったまま打ち殺されるのは、君やグレースが大切にしている子供達だ。エベレット、そんな未来嫌だろう?　だから、我々大人がこの戦いを終わらせなくてはならない。犠牲はつきものだが、君が協力してくれさえすれば、それを最小限に抑えられる」

　エベレットの震えがそっと止まった。それでも、目と目の間に迷いと苦悩の色が行き渡っている。

「頼むよ。私は君に、私の体の代金を払ってもらいたいだけじゃないんだ。君なら世界を平和に導ける。逆に君が何もしなかったら、また何万人もの人が無駄に死んでいくだけだぞ」

　そこまで言い切って、私は黙った。やるべきことはやった。あとはただ、人間としてのエベレットを待つだけだった。

「せめて毒ガスだったら……」

　やがて彼は絞り出すように言った。

「タンクや爆弾で殺されるより、苦しみが少ないだろうか……」

　毒ガスの製造には新たなコストもかかったが、帰ってくる利益はそれを易々と凌駕した。私とエベレットの睡眠時間が減れ

ば減るほど、社員たちの口座は潤った。ジェフェリーがご満悦顔で、妻と息子とニューヨークを旅行した。

「今までこれほどまで成功したヴァルナのトップはいない。あの黄金の髪を見てごらん。きっと金貨を絞って染めたに違いない」

　そう人々は囁いた。それを聞いて、私は崩れ落ちるほどの安堵を覚えるのだ。もう誰がどう見ても、私はヴァルナのトップだった。

　しかし、そんな成功の日々の中にも、当然苦痛は巣くっていた。無論私はグレースを恐れた。あれから一度も彼女に会っていなかったが、私は彼女が恐ろしかった。ちらりと見るのも嫌なくらい、名前を聞くのも震え上がるくらい、私はグレースを恐れた。舞踏会や晩餐会で、貴婦人のドレスが恐ろしく、ばったり彼女と会ってしまわないか、そればかり気にしていた。

　エベレットはただ無表情に、黙々と仕事をこなした。弱音一つ吐かず、文句ひとつ言わず、ただ報告書を提出した。私と寝るときは、言い聞かせるように呟いた。

「君は美しい。とても、とても美しい。君の美しさの前には、どんなものも無力だ。それほど美しい。一つ触れればあっという間に君に捕らわれる。どんなものも」

　イーサンとの会話はめっきり減った。顔を合わせることも少なくなった。共に過ごすのは、鹿の園か、友達と会う時だけだった。

　それでも仕方ない、と私は思った。成功には犠牲はつきものなのだ。例え反発を食らおうと、辛い思いをしようと、私は進まなければいけない。だって、私はこの町の頂点なのだから。

　さて、エベレットには「参戦を避けたい」と私は言った。ところが、ご存じの通り結局アメリカは戦火から逃れることはできなかった。政府が米軍の参戦を公表したのは、一九一七年の春だった。

「やった！　参戦だ！」

　そう叫んで、ジョンとアレックは大喜びした。

「とうとう政府も重い腰を上げやがった！　弱腰のウィルソンもようやく覚悟が決まったんだな！」

　そういって彼らは笑った。私は、この参戦が欧州への公債を回収するためのものだと知っていたので、少し複雑だった。それに、エベレットに言ったこともその場限りの嘘では決してなかったし、友人が戦場で戦う、ということにも不安はあった。ところが、決定してしまったことに文句は言えない。男らしく腹をくくるしかなかった。

　参戦が決まると、すぐに兵士を選抜する抽選が開始された。ジョンとアレックは抽選を通るよう、神様に祈り続けた。片や、パトリックは少し複雑そうに見えた。彼はすでに良心的兵役拒否の手続きを済ませていたが、私と同じで大事な友達が兵役に就くのは嫌だったのだろう。しかし、二人の前では笑顔を作っていた。

　まだ十六歳のイーサンは兵役の付く年齢に達しなかったため、軍に行くことはなかった。私は社会ステータスのおかげで選

考対象にはならなかった。元から軍人になるつもりはさらさらないので、私は気楽なものだったが、アレックとジョンの緊張の仕様は、少し気の毒になるほどだった。そしてとうとう結果が公表された。アレック・バルダーソン、ジョン・ヘイスティングス、両者共に当選。出征決定！

　私は二人を自室に呼んで盛大に祝った。歌って、上等の煙草を蒸かして、シャンパンを惜しまず開けた。もちろん、喜びだけが私の心を占めていたわけではなかった。不安も強かった。情報に優れた私が、前線がどれだけ悲惨か知らないはずがない。友達がそんなところに行くなんて、恐ろしくてしょうがなかった。だけど、喜ぶ二人の前でどうして泣きそうな顔ができるだろう。「行かないで」なんて女々しく縋れるだろう。もう決まったことだ。仕方ないことだ。それなら男らしく覚悟を決めて、笑顔で送ってやるのが友達ってもんじゃないのか。それはパトリックもまた同じで、彼も精いっぱいの笑顔を浮かべて景気よくグラスを空けた。

　だけどただ一人、イーサンは相変わらず押し黙り、騒々しい笑い声を尻目にグラスの縁を咥えていた。まるで迷子の小さな女の子のように、濃い色の瞳が濡れていた。

「やっぱりダメだよ……」

　やがて、彼が消え入りそうな声でそう呟いた。次の声はもう少しはっきりしていた。

「ねえ、やっぱりやめようよ！　ジョン、アレック！　戦場なんて危ないとこ行っちゃダメだよ！　俺、やっぱり嫌だよ！友達が戦うなんて！」

「イーサン！」

　私は苛ついて怒鳴った。

「いい加減にしろ、何だその態度は！　これから国のために戦う人に何てこと言うんだ！」

「落ち着けよ、ロバート」

　私の肩を、そっとアレックが押さえた。彼は優しい目でイーサンの前に膝をついた。

「イーサン。お前は昔から気配りができるいい子だったよな。今もそうだ。心配してくれてありがとうな。でも、俺もジョンも大丈夫だよ。何も心配することない。すぐに元気に帰ってくるさ」

「そうだぞ、イーサン！　俺もアレックも体育の成績は学年トップなんだからな！」

　イーサンはアレックとジョンに頭を撫でられ、ぐすぐすと泣き出した。

「ほら泣くなって！　イーサン。お前の一番近くにいる人を思い出してみろよ。そう、ロバートだ。お前が心配しなくたって、俺達にはロバートがいる。あいつが俺達を守ってくれる強い武器を作ってくれるんだ。な、ロバートがいる限り、俺達はきっと無事に帰ってくるよ」

　ジョンとアレックがイーサンを抱きしめ、パトリックも三人に寄り添った。私は親友とイーサンを遠巻きに眺めた。固めた拳の指に力が入った。

　俺しかいない。もう毒ガスも鉄もただの金儲けのためのものじゃない。俺が友達を守るんだ。銃後でも俺は彼らと闘わなくてはいけない。もっと頑張ろう。みんなを守れるのは、俺しかいないんだ。

　熱い血が、新品のカーキ色の服を着た青

年と同じように体を駆け巡った。最早グレースに感じていた恐怖など、取るに足らないものだった。
　どんな手を使ってでも武器を作ろう。俺が友達を守るんだ。

　抽選結果発表から数週間経つと、ジョンとアレックの二人はカンザスの訓練場に向かった。それからというもの、二人からは頻繁に手紙が届いた。思ったよりも訓練はキツイし、教官は鬼のように怖い。だけど辛いときはいつも君達のことを思い出している。そうすればまた頑張れるんだ。手紙にはいつもこう書いてあった。
　そして一か月の訓練も終わり、とうとう二人はフランスに移動するため、ニュージャージーの港へと移った。彼らの見送りに、私とイーサンとパトリックは三人連れ立ってニュージャージーのホテルに向かった。「護衛もつけずに一泊なんて舐めてんのか！」と騒ぐジェフェリーを何とか泣き落とし、私は目深に帽子を被って汽車に乗ったのだ。
　ホテルでくつろいでいると、やがて外泊許可をもらったアレックとジョンがやって来た。一か月ぶりに友達に会い、私達は大はしゃぎだった。ジョンとアレックは真新しい軍服を見せびらかし、訓練基地での苦労を語り、そしていかに自分の銃の腕前が上等か自慢した。そして大いに食べ、飲み、大声で軍歌を歌った。イーサンでさえ、その日は笑顔だった。
「いやあ、マジで遠距離射撃訓練を一時間寝坊して怒られたときは死ぬかと思ったなあ！　一日飯抜きだぜ！」
　アレックが酔っ払って自分のやらかし話を披露し始めた。私達はそれを聞いて、「さすがにマズいだろ、それは！」と笑い転げた。
「でもね、俺は何があっても平気だったよ！　だって守るべきものがちゃんとあるんだからさ！　誰かを守るためだって思えば、どんな訓練も耐えられたんだ」
「うわあ、さすが詩人様は言うことが一々恥ずかしいな！　飯抜きの時、めちゃくちゃキレてたくせによ！」
　アレックの甘い声を、ジョンが茶化した。酔いが気持ちよくて、私達の唇からは簡単に笑い声が漏れ出た。

　アレックが私のベッドを訪れたのは、その夜更けだった。ほどよく酔っ払って、みんなそれぞれのベッドでぐっすり眠りこんでいた。私も目を閉じてうとうと微睡んでいたが、「ロバート」という囁きが耳をくすぐり、布団を押しのけるとアレックが私のベッドに腰かけていた。
「アレック？　寝ないのか？　明日早いだろ？」
「うん。でもちょっと、行く前に話したくて」
　そう言って、彼は俯いたまま話し続けた。
「えっと、ロバート。前にさ、女の人の愛人を作ったって言ってよね。君ってずっと女っ気がなかったから、ちょっとびっくりしてさ。でさ、その……その彼女とはやっぱりそういう関係なの？」

「ああ、ヴァイオレットのことか」
おかしなことを聞くもんだ、と私は忍び笑いをしながら答えた。
「アレック、君だから教えるけど、実は俺と彼女は名目上は愛人ってだけで、本当はただの友達なんだ。絶対にベッドを共にしないって約束でね。あんまり人に言うなよ」
「あ、そうなんだ……やっぱり」
アレックが顔を上げた。電気を消した部屋でも分かるくらい晴れやかな顔だった。
「ねえ、ロバート。俺はいつも、君に初めて会った時を思い出すんだ」
そう言って、彼は寝台に登り、枕の両脇に手をついて私を見下ろした。
「君は美しかった。今まで生きてきた中で、こんなに奇麗な人初めてだったんだ。君が小銭を落としたのは幸運だった。だって君と仲良くなれる機会を手に入れられたから」
アレックが身をシーツの上に乗り出させた。私が何十年も下から見て来た目が、そこにあった。
「あれからずっと君を追って来たよ。詩だっていくつも書いた。ロバート、俺、君が好きだよ」
彼の顔が私の顔に迫った。私の手が動いたのは、彼への答えが出る前だった。アレックは呆けた顔で布団に尻餅をついた。私の手に、顔を思いきり押しのけられたのだ。
「ロバート?」
ポカンとしたアレックに、私は息を切らしてようやく口を開けた。
「ごめん。ごめんね、アレック……」
アレックの顔がたちまち悲しみに沈んだ。だけど、私はどうしても彼を受け入れられなかった。してやれることは、深く頭を下げることだけだった。
「アレック、ごめん……君は無理だ……」
どうしても彼とそうなるのは嫌だった。エベレットやリズリー氏や行きずりの男はよくてもアレックは嫌だった。アンも理由の一つだが、例えアンという恋人がいないとしても、アレックは嫌だった。彼が好きだからこそだった。初めてできた友達だったのだ。初めて、何の深い思いもなく「大好き」という言葉を使える相手だった。彼とだけは寝たくなかった。それなのに。あの時、私は完全に動揺していた。こんな感情を唐突に、決して微塵もそんな期待をしていなかった相手に暴露されて、驚きと失望の中で震えていた。
「そっか……いいよ、ごめんね、変なこと言って」
アレックは寂しそうに笑うと、私の傍から身を引いた。
動揺が去ると、私は申し訳なさでいっぱいになった。出征前に彼を悲しませてしまった。これから大きな役目を果たす友達に、なんという思いをさせてしまったのだろう。
「アレック!」
私は寝台に戻る彼を呼び止めた。
「でも、君の気持ちが知れて嬉しかった! こんなにも思ってくれていて、嬉しかったよ! 本当だ! 俺は君とそういう関係にはなれないけど、でも君のことはずっと好きだよ!」
「うん。ありがとう、ロバート」
肩越しに振り向いて、アレックはほんの

り明るく笑っていた。

　翌朝、船が港に着いた。私達三人は、アレックとジョンを順々に抱きしめてキスをし、ポケットの中にキャンディやビスケットをこっそり入れてやった。イーサンはもう泣くこともなく、「暖かくしてね」と手作りの毛糸の下着を二人に渡した。

　アレックには、彼の家族の他にもう一人見送り人がいた。ブロンドの髪の若い娘。見たところ私と同い年、アレックより少し年上だろうか。横顔に見覚えがあった。鏡の中で知っている顔だ。

「ああ、あの娘？　シシーってんだ。アレックの彼女だよ」

　私の問いに、ジョンはこう答えた。私は信じられない気持ちで、アレックと熱烈なキスを交わすシシーを見つめた。昨夜のことが苦々しく思い出された。顔にこの思いを出してはいけないと分かっていたので、私は歪みそうになる唇を強く噛んだ。

　船の汽笛はやがてアレックとシシーを引き離した。彼はジョンと連れ立って船のタラップを上がって行ってしまった。私はそこで我に返った。ようやく寂しさが突き上げ、せめてもの手向けに星条旗を思いきり振った。

「行ってきまーす！」

　そう二人は口々に叫んだ。アレックの瞳は濡れ濡れと輝いていた。船はゆっくり離れていった。私が知らない海の向こうへゆっくり、ゆっくり。

　今まで戦争は金儲けの手段だった。でも友達が水平線の向こうに消えていくのを見て、私は初めて指を組んで神様に祈った。

　ああ、どうか勝てますように！　被害が少なく済みますように！　どうか神様、我が軍にご加護をください！　どうか二人をお守りください！

「とうとう友達も行ってしまったか」

　そう寝室で、エベレットが呟いた。私は過ぎに起き上って何か言おうとしたが、その必要はなかった。先に喋ったのは彼だった。

「なら、もっと武器を作らなければ」

　アレックとジョンからの手紙は、一週間すると届いた。船での旅は退屈ではあるが、まあ、慣れれば悪くない。病気が流行っているが、体の強い自分達は大丈夫だから心配しないでくれ。いつも通りよく食べて、寝て、甲板でレスリングなんかしていつも通りやってる。こんなことが書かれていた。

　しばらくすると、いよいよ戦闘が開始された。シャトー・ティエリーでの開戦を知ると、しばらく不安で夜も眠れなかった。しかし、やがて新聞と手紙が、私の不安を消してくれた。米軍が大勝利を収めたのだ。

　その戦いで、アレックは大活躍した。あのパーシング将軍と夕食を共にしたほどだった。私はそう書かれた手紙を読んで友人の名誉を喜んだ。パトリックはほっとした表情を見せた。イーサンは、顔は笑っていた。何も言わなかったが。

　しかし、不思議なことが一つあった。

ジョンからの手紙が、戦闘開始から一向に来なくなったのだ。最初、もしや何かあったのだろうか、と不安になったが、とは言え戦死の報告も負傷の報告も全くなく、アレックの手紙にもそんな趣旨のことは言及されていなかった。多分屹度、忙しくて手紙を出す暇もないのだろう、と私はそう思い込むことにした。

　シャトー・ティエリーの戦いも過ぎ、戦地はムーズ・アルゴンヌへと移った。かなり激しい戦いであったらしいが、何とか二人とも無事だった。アレックは何度も手紙を書いて寄越し、その度に私はほっとした。戦いの合間の休息、フランスの女の子との夜、名誉、戦勝。書かれていること全てがおもしろく、そのたびになぜか自分までも誇らしい気持ちになるのだった。

　しかし、イーサンは黙って手紙を読んだ。アレックのどの手紙にも彼は押し黙る。そして、無言で手紙を私に返すのだった。

　秋が去って冬がやって来た。西とは言え、きっと塹壕の中は冷たく寒いだろう。そうイーサンに言われ、私は酒や毛布や温めて食べる缶詰スープなどを大量に発注し、アレックとジョンのいる部隊に送った。

　そんな冬のさなかだった。もう社員の退勤時刻を二時間も回った遅い時間に、ジェフェリーが私のデスクにやって来た。

「まだ帰らないのか？　今日は残業なしだろう。奥さんと子供を待たせるんじゃない」

「お気遣いありがとうございます。ですが本日は人のいない場所で、お話ししたいことがあって……」

　いつも冷静なジェフェリーが、苦しそうな表情を作っていた。嫌な予感がした。

「どうした。言ってみろ」

「若旦那様の女性関係のことです」

　なんだ、そんなことか、と私は最初の緊張を解してため息を吐いた。十六歳になったイーサンは先月目出度く童貞を卒業した。相手は無論、ヴァレリア・デュヴィーヌである。それからと言うもの、しごく真っ当な男らしく性交の快感に目覚めたイーサンは、足しげく鹿の園を訪れるようになったのだ。若い男なら別に不思議なことでもないし、ヴァルナ社の金を傾けるほどの散財もしていないのだが、お堅い愛妻家のジェフェリーには不埒なことと映るのだろうか。

「イーサンの女なら、お前が口をはさむ事じゃあるまいさ。十代の性欲旺盛な若者なら、セックスに貪欲になったって不思議じゃない。相手は信頼できる女だし、避妊もしっかりしている。イーサンの結婚相手を選ぶ時期になるまでは放っておきなさい」

「旦那様……。ご存じないのですか。若旦那様のお相手はミス・デュヴィーヌだけではないのです」

　ジェフェリーの眉間に再び皺が寄った。一度は去った不安がもう一度蘇った。

「仰るように、年頃の若旦那様が娼館に通い詰めたところで、それは何の問題もありません。普通のことです。しかし、近頃はそれも度が過ぎています。信頼できる娼婦を抱くならともかくとして、最近はメイドやヴィシュヌ街の町娘にまで手を出して

いるとか……。女中頭のミリーに聞いてまさかとは思いましたが、先日、その……資料室で新入りのメイドと若旦那様が二人きりなのを見かけまして……。声をかけて注意しようかと思いましたが、状況的にそれもできずじまいで……」

　私は目の前が真っ暗になった。そんなイーサン、想像もできなかった。可愛いものが大好きで、いつも私にくっついていたイーサンが、そんな風に淫らな行為にふけっているなど。私が信頼したヴァレリアならともかく、よく知りもしない相手に甘い声を使って囁き、快楽のためだけに服を脱ぐイーサンなど。

「旦那様。私なら分かりませんが、若旦那様はあなたの意見ならお聞き入れくださると思います。どうか、この機会にきつくお叱りになってください。もし相手を孕ませたり、姦淫沙汰になどなったりしたら取り返しがつきません」

　ジェフェリーは真っ当なことを言っていた。全て正しい事だった。頷くしかなかった。

　翌日、私はイーサンを部屋に呼んだ。

「なぜ呼ばれたか分かるか」

　怒気を声に含ませて、私は言った。イーサンは黙りこくっていた。

「お前、自分がどんな恥ずかしいことをしているか分かっているのか！」

　黙ったままのイーサンに突然神経を逆なでされ、私は彼に怒鳴った。

「お前はな、素人女を娼婦扱いして俺やヴァレリアの顔に泥を塗ってるんだぞ！　ヴァルナ社のナンバーツーがこんなふしだら野郎だと露見したらどうするつもりだ！　今が一番大事な時なのに、会社のメンツを潰す気か！　いい加減自分の立場をわきまえろ！」

「娼婦扱いされてるのは俺の方だ」

　イーサンは静かに言い返した。黒い瞳が揺れていた。

「どんな女も俺が隣に来ると喜んで服を脱ぎだす。ヴァルナ社のプリンスと一夜でもヤれるなら貞操なんてどうでもいいわ、とばかりにな。俺は自分がどんな立場なのかよく知ってて、それを使って女と寝てるんだ。あんただってそうだろ」

　何も言い返せなかった。こんな言葉をこの子が使うことすら信じられなかった。

「もう怒らないの」

　イーサンはなおも静かに言った。それでも、どこか泣きそうに見えた。

「言うことはこれだけなの。なら俺、部屋に戻るけど」

「いいや、まだだ」

　私は立ち上がってイーサンに近づいた。そして、いつの間にか男らしく肉付いた、それでも骨の柔らかい体を抱きしめた。あれだけのことを言ったのにも関わらず、イーサンは何の抵抗もしなかった。

「心配なんだよ、イーサン」

　私は彼の顔に接吻していった。決して甘い言葉で彼を誑し込もうなどとは思っていなかった。

「もしお前がこんなことを続けて、何かトラブルでも起こしたらどうするつもりなんだ。自分の人生を捨ててまで、責任を取

らなきゃいけなくなるんだぞ。お前はまだ若い。結婚の話も出ないうちに人生を不意にするのか？　そんなの俺が許さない。お前にそんな一生で人生を終えてほしくないんだ。分かったら今後見境ないことは止してくれ。俺はお前に、きちんとしたお嫁さんをやりたいんだよ」

イーサンは素直に私の肩に頬を擦り付けた。

「ずっとこうしていたい」

と、彼は呟いた。その一言で、今後彼は淫らな行いを改めてくれる、と分かった。そして紛れもなく私を愛していると。しかし、何故か不安は消えなかった。これで解決になったのかどうか、あの頃は分からなかった。結局不安は的中していたのだが、それが分かったのは、今からほんの数か月前。

十一月がやって来た。薄手のコートを毛織に変える季節。この月は嬉しいことが続いた。まず、イーサンは予想通り行いを改めて、私とジェフェリー、ミリーを安心させてくれた。そして、敵軍の不利が続き、戦争が終わりに差し掛かっていることが薄っすらと感じ取れた。貿易で十分すぎる利益を出したヴァルナ社は、終戦を恐れずに済んだ。マフィア相手の国内の商売に路線を戻しても、いきなり困窮することはまずない。

アレックからの最後の手紙は届いたのは、終戦前日のことだった。

「ミスター・クロス。相変わらず銃を構えて走り続けています。一度足を前に出すとね、もう前も後ろも見ることなく走っていくんだ。光り輝く前だけを見つめてね。ねえ、ミスター・クロス。おもしろかったですか？　私の手紙は」

私をロバートと呼ばなかった。大急ぎで手紙を畳んで文箱に収めた。文箱を机の引き出しに仕舞おうとしたその時、部屋の扉が開き、イーサンが顔を出した。

「手紙が来たの？」

私は勢いよく首を横に振った。冷や汗が背を伝った。

「もうすぐみんな帰ってくる？」

イーサンはデスクの上に腰掛けて言った。

「ああ。聞くところによれば、どうやらドイツで反乱があったらしい。もうすぐ敵が負けて戦争もおしまいになるよ」

ふと、イーサンの指が私の顎に触れた。顎を持ち上げられ、イーサンの瞳に自分の姿が映った。

「俺って駄目な奴だな」

そう彼は呟いた。

「なんにも決められないんだもの」

「そんな風に自分を悪く言うんじゃない」

「だって、よく俺に怒るじゃないか」

「怒るさ。愛しているから」

イーサンは鋭い瞳で顔を近づけた。眼球の底の真実まで見透かそうとしているかのような瞳だった。暖かい、命にあふれる吐息が、私の唇に被さった。しかし、イーサンはそこで顔を離した。私の唇と、彼の唇が重なる寸前だった。

「お休み」

そう言い残して、彼は去った。

終戦と知らせと米軍の帰国を聞き、私とイーサン、パトリックは大喜びした。そしてひたすらアレックとジョンの乗る船を、心待ちにした。

ニュージャージーの港に、私達三人はまた揃った。ジェフェリーは最早何の文句も言わなかった。

「元気でいてくれるといいな」

そうパトリックは呟いた。彼は優しい目の奥に少し不安を湛えていた。そんな目が、あの時の私には理解できなかった。

汽笛の音が近づいて、やがて二人の船が港に着いた。ブラスバンドの奏でる音楽が湧き立ち、空砲が鳴り響く。タラップが降り、トレンチコートにすっぽり埋もれた兵士達が港に流れた。

「アレック！　ジョン！」

私達三人はすぐに二人を見つけた。アレックとジョンは煤で汚れた顔を驚きで広げ、次に絵に描いたような明るい笑顔で走り寄ってきた。

「お帰り！　本当にお帰り！」

口々にそう叫び、私達は二人を順々に抱きしめた。アレックの体から、鉄と火薬の匂いと共に、夏のひだまりとアイスクリームの匂いが立ち上っていた。温かく血の通う頬を自分の頬を摺り寄せると、アレックの腕に力が籠った。

「よかった、ロバート。帰ってこれてよかった……！」

そう何度も囁くアレックの声に身を任せて、私は嬉しさに震えた。そんな私にジョンが笑って言った。

「おい、おい！　誤解すんなよ、ロバート！」

その日の夜、私達五人は共に夕食を取った。二人は盛んに食べ、飲み、笑った。

パトリックは優しい声で頻りに「また会えてうれしい」と言い、イーサンは自分で焼いたチェリーパイを二人に勧めた。私は何本もボトルを開け、気持ちの良い酔いと共に久しぶりの五人での会話を楽しんだ。

料理も酒も尽き、やがてジョンとイーサンとパトリックは玉突きをしに遊戯室に行き、私とアレックは煙草を吸いにベランダに出た。星々が盛大に輝く中、私達二人は静かに贅沢な煙を楽しんだ。

「ねえ、ロバート」

不意にアレックが口を開いたのは、煙草が二本目になった時だった。

「俺がいない間、どんなだった？」

「ああ、忙しくしてたよ。ずっと書類に埋もれててさ。まあ、それなりに充実した毎日だったけど」

私達は口を閉じてクスクス笑った。

「ロバート」

笑いをゆっくり収めてアレックは言った。

「俺、シシーに別れの手紙を出したんだ」

私は、二年前港で見たあの娘を思い出した。驚きのあまり、どうしてそんなことを！　せっかく無事に帰って来たのにあんまり惜しいじゃないか！と叫ぼうとしたが、彼の手紙の一つを思い出し、ふとふざけて言った。

「なるほど！　お前、どこぞのパリ娘に恋でもしたな！」

アレックが勢いよく笑った。大気を劈くような笑い声だった。当たっている可能性が高い、と私は思ってほっとした。そうだったらどんなに嬉しいか。アレックの新しいパリの恋人は、黒髪か赤毛がいい。金髪や青い目は嫌だ。私やシシーのような。

十二時も回った頃、酔っ払ったアレックとジョンは連れ立って帰った。アレックは始終ふざけた。ジョンは玄関を出る間際、ちらりと私を見た。あの時の目がどうにも気になった。しかし私が先に目を伏せた。

パトリックはしばらく残った。特に何をするわけでもなく、ただ黙って暖炉の前に座っていた。彼の隣にはイーサンがひっそりと寄り添っていた。やがてパトリックも「じゃあ、また」とだけ言って帰って行った。

友達がみんな帰ると、イーサンは「お休み」も言わずに部屋へ戻った。私は今で彼の無言の背中を見つめた。あの背中を、なぜか呼び止めたい、と思った。それでも遠ざかっていくあの子が、それを許さなかった。

きっと疲れたんだろうな。

そう思って私は、友達が去った後の静かな部屋を見渡した。

きっと疲れてたんだ。

そう何度も呟く中、部屋の静けさがしんしんと胸に染み通っていった。

次の日の朝、私は穏やかな気持で目を覚ました。昨夜の酔いと疲れが不思議に心地よく、戦勝の喜びがじんわりと残っていた。シーツに反射する朝日を眺めていると、昨日の薄ら寒い部屋のことなど、気にならなくなった。

早々に一人で着替えて食堂に降りていくと、イーサンが今朝届いたのだろう電報を一枚手にして座っていた。

「おはよう。何の知らせなの？」

そう言って、私は彼に接吻しようと身を屈めた。しかし、彼は首を捻って私の唇をよけ、その代わり眼球だけをぐるりと寄越した。いつものつぶらに黒々と濡れた瞳ではなく、白目勝ちの張り詰めた瞳だった。

「ロバート」

掠れた声で言った。電報を握る手がぶるぶると震えていた。

「アレックが自殺した」

涙は一滴たりとも流せなかった。冬の乾いた風が吹きすさぶ中、正装の私はアレックの埋まった墓の前に呆然と立ち尽くしていた。父親と一緒に震える声で聖書を読むパトリックも、泣いてばかりいるイーサンも、涙は流さないのにはっきり見えなかった。

昨日、アレックは土に立っていた。生きていたんだ。死が隣り合わせの戦場から見事生還した。敵に撃たれ、祖国の愛を胸に死ぬことだって十分あり得た。だが、彼は生き残った。もう一度私に会いに帰ってきてくれた。生き残った喜びに溢れていた。なのに死んだ。自分で死んだのだ。いつだ

って死ねる戦場で殺されたのではなく、安全な我が家で、自分で死んだのだ。
　血の気の引いた唇をブツブツと動かしている内に、私の心はジョンを欲しがった。悲しみを癒す言葉よりも、心を埋める「なぜ」の答えを私は知りたかった。
　ジョンは黙って立っていた。泣きもせず、茫然とすることもなく、ただ黙って厳しい目を土の上に落としていた。やがてその目が、靴音と共に近づいてきた私に向けられた。
「ジョン……」
　掠れた声で問いかけた。
「一体何があったんだよ……。昨日別れた後……いや、戦場で……違う、もっと前に……。教えてくれ、一体どうしてアレックは自殺なんかしたんだ……」
「教えてくれだって!?」
　ジョンが激しい声で怒鳴った。いつもはおちゃらけた陽気な顔が、凄まじい憎悪でどす黒くなり、私はもうなんと言い表したらいいか分からないほどの恐怖に襲われた。
「教えてくれ!?　今更になってか！　そうだな、お前は大事な友達一人亡くすまで碌に考えようともしなかったってか！　ああ、いいさ、教えてやるよ！　アレックが死んだのは……いや、あいつを殺したのは敵軍でもピストルでもねえ！　お前だ、ロバート！　お前のせいで死んだんだ！」
　体が内側から冷え切っていくのを感じた。彼の体の埋まっている土が、不意に足に心地悪くなった。
「俺のせい？」
「ここまで言ってもまだ分かんねえか！　お前は俺達を守るなんて御大層なことを言いながら、結局金のことしか考えてなかったんだ！　戦場で銃を取った俺達をひたすら焚き付け、戦わせて、自分は安全なところで利益だけを持って行ったんだ！　いつ死ぬか分からない俺達のことなんてどうでもよかった！　どんなだったと思うよ！　当たり前のように死体が転がる戦場で寝起きする気持ちが！　お前の売ったガスで苦しんで死んでいく人々を目の当たりにする気持ちが！　どんなだったと思うよ！」
　涙が一粒、二粒と流れ落ちていった。今日、私が初めて感じる温度だった。驚きも恐れも、今やただひたすらに深い深い絶望となった。
「そうか」
　かろうじて、消え入りそうな声は出せた。
「嫌いだったんだ。ずっと、ずっと俺が嫌いだったんだな……君も、アレックも……俺は恨まれてたんだな……」
「それは！」
　私の掠れて震える声に、ジョンは再び叫んだ。その時の彼の目は、怒りを半分失くしていた。残りのとび色の瞳には、困惑と悲しみが、忘れた怒りの代わりに瞬いていた。
「それは違う。俺もアレックも、ずっと君が大好きだった。あんなひどい戦争の中でも、君は大事な友達だった。いつか俺達の苦しみに気づいてくれるかもしれない、それまでは希望を失わず、君を好きでいようって！」
　ジョンの目に迷いが消えた。今度は怒り

を超えて、煮えたぎるような憎しみが、彼を燃え立たせた。
「でもお前は最後まで何も気づかなかった！　嫌、見ようと思えばいくらでも見れたものに、わざと目を背けたんだ！　お前は知っていたんだ！　本当は知っていた！　気づかないふりをしていただけだったんだ！　俺とアレックは昨日初めてお前を憎んだ！　俺はお前をもう友達だと思わないと決めた！　だが、アレックの答えは自殺だった！　分かったか、ロバート！　何もかもお前のせいだ！　お前の卑怯な行いがアレックを殺したんだ！　お前の生きた人生ってのはな、大事な友達を殺すくらい、禄でもないものだったんだよ！」
　ジョンは、涙でぬれた丸い瞳を、一番最後にありったけの憎しみで押し曲げた。そして、吐き捨てるように、しかし震える語尾はそのままに、真っ直ぐに私に言った。
「お前が死ねばよかったのに！」
　このくらいの悪口、二十二になるまで何度だって言われてきた。笑って跳ね除けるくらいわけなかった。しかし、私は何もできなかった。泣くことも、怒ることも、笑い飛ばすことも。そしてただ何もせず突っ立っている自分が、もうどうにも言えないほど惨めに感じた。
「やめて！　何てこと言うの！」
　そう叫んで、イーサンが突然駆け寄ってきた。彼は涙でぐちゃぐちゃにゆがめた顔で私に縋りつき、ジョンに叫んだ。
「お願いだからそんなひどいこと言わないで！　お願いだから！　もう聞きたくない！　こんなこと！」
　年上のパトリックまで声を上げて泣き始めた。イーサンの子供らしい高い泣き声、むせび泣くパトリックの声に包まれて、私とジョンはひたすら胸のやるせなさを抱えて見つめあっていた。しかし、先に目をそらしたのはジョンだった。彼はやがて、目に涙を溜めながら俯いて墓地を出て行った。その後ろ姿が、例えようもなく切なかった。彼が遥か昔、やせ細ってギラギラと寂しい目の輝きを宿していたかつての私のように思えた。
　こうして私の戦争は終わった。同時に暖かく楽しかった、月並みな友情も終わった。そんな友情の崩壊を、アレックの墓が静かに見つめていた。
　あれから何を思って生活していたか、今ではハッきりと思い出せないが、それでも戦勝を祝うラジオの声が変にくぐもって聞こえていたことだけは覚えている。浮かれ騒ぐ人々を、私とイーサン、ジョンとパトリックはただ尻目に、俯いて生きていた。誰かが「おめでとう」と言う度に、アレックの、あの無邪気な笑顔が頭に浮かんで離れず、その度に激しい嗚咽に苦しんだ。あの柔らかい髪に冷たい銃口を当てた時。遺書を書こうとして鉛筆を取り、そして諦めて机の上に置いた時。私に最後の強い目を向けて煙草を吸っていた時。そんな時のアレックが何度も強烈に頭に登り、心を鋭い棘が刺した。何度も何度も。
　だが、あの戦争はアレック一人の死では終わらなかった。

終戦から一週間ほど経った頃、イーサンと二人でいた部屋へ、ジェフェリーが駆け込んできた。いつも冷静沈着で、自身に満ち溢れている彼が、その時はひどく取り乱していた。

「旦那様！　大変です！」

　そう叫んで私と目が合った時、彼は例えようもないほどの苦痛を唇に浮かべた。そして絞り出すような声で言った。

「ミスター・ロレンス・エベレットが自殺しました」

　私はただ虚ろな目をジェフェリーに向けた。彼は、激しい憐みの視線を私達に向けたきり、黙り込んで俯いた。心の中に浮かんだのは、エベレットではなくグレースだった。ある日の夜会で、「私達、来年の初夏に結婚しますの！」とはしゃいでいたグレース。初めて出会った頃よりも、ずっと子供らしく美しかった。どんな人よりも、アンよりも美しかったのだ。

「どうしてそんなひどいことが……」

　イーサンだけが声を出した。黙ったままの私とは違っていた。そして次に、私が最も聞きたくないことを言った。

「じゃあ、ミス・、マクファーレンは……グレースは一体どうなったというんだ……」

「当然婚約は解消です……それに破産も……ミスター・エベレットに財産を使いつぶされて……」

　イーサンが床にへたり込んだ。彼は喉を押さえ、振り絞るような声で泣き出した。彼は泣く事が出来た。人を思って泣けたのだ。だが私は。

　エベレットの葬式に行くことはできなかった。しかしイーサンは向かった。一人で正装を身に着け、一人で車を手配して。私は彼の帰りを、息を押し殺し、歯を食いしばって待ち続けた。

　俺の夢とは、と一人考え続けた。

　結局、俺の夢とは何だったんだろう。ここに座り、この街の最高の力を手に入れ、人々の夢という夢を攫いつくした。どんな恥辱にも耐え、どんな犠牲をも物ともせず進んでいこうと決めた。アレックもエベレットもグレースも、我慢しなければいけない試練の一つのはずだ。知らん顔をしなければ。それがどうした、と笑い飛ばさねば。そんなこともできないで、この地位に留まることはできない。そうだ。どうってことない。笑い飛ばせ。俺はヴァルナ社のトップだ。悪に悪を極めた者だけが手に入れられる地位だ。もう俺は綺麗でも何でもない。何があってももう遅い。そう覚悟したはずだ。夢のためには何でもすると。

　笑おうとした。上を向いて唇をゆがめようとした。だが、視界がにじみ、息は震え、熱い涙が滴り落ちた。耳の奥に、「お前が死ねばよかったのに！」と叫んだジョンの声が蘇ってきた。

　どうして今泣いているのだろう。俺は夢を叶えたはずだ。飢えることも、見下されることもなくなった。どの権力者よりも成功をおさめ、名誉と富を手に入れた。大事なイーサンだって高い地位につけることができた。夢見たことすべてが叶った。夢を叶えれば幸せになれるはずだ。笑いだけ

の人生を手に入れるはずだった。でも俺は笑えていない。泣くばかりだ。泣いて泣いて、惨めな思いに耐えるばかりだ。なぜ？　ああ、嫌だ。こんなことに気づくなんて。夢を叶えた先にあるものが、涙と苦悩だけだなんて。こんな思いをするために、俺はあれほど努力したのか？　友達を殺し、憧れの女性を貶め、生涯をかけて愛したイーサンから軽蔑され、そんな結果のために二十年をかけたのか？　何だったんだ、俺の人生は。何のために生きてきたんだ。

虚無に問いかける私のもとに、イーサンがようやく帰ってきた。彼は帽子だけ脱ぎ、正装のままでじっと私を見つめた。その目を見て、私はもう誰にも縋れない事を思い知った。

「軽蔑しただろう？」

と、掠れた声で呟いた。

「俺は卑怯者だな。口では大層なことを言って、ひたすら現実を見ようとしなかった。ただ、不確かな夢なんて嘘っぽちに騙されて、嫌なことからは目を背けて走り続けていた。その夢さえも、今は何だったのか分からない。一体何を追い求め、何を夢見て来たのか。答えを出すのが遅すぎた。もうだめだ。何もかもお終いになった」

「俺は」

イーサンは私を責めることもなく、静かに言った。

「これからどうしたらいい」

その問いの主語は、彼に限ったことではなかった。何も答えられなかった。夢を叶えた後のことを、私も彼も、誰一人として考えてなどいなかった。新たに夢を描くこともできなかった。

「俺にさえ出会わなかったら」

私は彼の手に触れた。イーサンは跪き、私の胸に頭を預けた。

「お前は幸せだったかもしれない」

イーサンは深く息を吸った。そして私の胸に強く抱き着いた。指は曲げられ、シャツを力強く握りしめた。まるで赤ん坊のように。

「あなたは俺を、母さんから取り出してくれた」

静かに、イーサンは呟いた。

「あの街じゃ、赤ん坊なんて殺されて同然だった。俺がいたってあなたの邪魔になるだけだった。なのにあなたは、手を血に染めて俺を母さんから取り出してくれた。俺を育てるために体を汚してくれた」

イーサンが頬を摺り寄せた。すでに湿った頬だった。何年も何年も、湿らせていたことだろう。

「でも、それが全部無意味だったなんて俺は思わない。夢に騙されていたなんてそんなのおかしいよ。あの時のあなたは嘘なんてついていなかった。あの時は本当の心で、俺を育ててたでしょう？　ねえ、俺を愛してたのは嘘じゃないでしょう？」

彼の言葉でようやく気付いた。嘘をつかない真実が、私の中にあったのだ、と。私はイーサンを愛していた。間違いなく愛していた。彼に何も求めていなかった。彼をこの手に抱いた時から愛していた。そして母への愛も本当だった。アレック、ジョン、パトリック、あの三人への愛も。グレース

への焼けつくような憧れも。夢に騙されてなどいなかった。本当だった。真実だった。
「もう俺のことはいいんだ」
イーサンが私を見た。ぱっちりと大きな濡れ濡れと黒い瞳に、葛藤の苦しみから生まれた深い愛を表していた。
「過去はどうにもならない。でも、未来は変えられる。今からだって正しいことを、嘘じゃないことができるはずだよ。やるしかない、ロバート。今できることが一つあるはずだ。俺を愛してるなら、どうか成し遂げてほしい」
イーサンは私の頬を抱いて、額に接吻した。暖かな唇に触れられて、私は自分の使命が何かを理解した。もう一つ、まだ叶えられる真実が残っていた。八歳の頃から大切にしまっておいた真実だった。
アンへの恋。それを叶えろ、とイーサンは言ったのだ。
あくる日の朝は、気持ちの良い快晴だった。私は散々迷いに迷った。何を着て行こうか。車にしようか、徒歩にしようか。迷って迷って、結局私はあの日と同じように、千鳥格子柄の服に鳥打帽を被った。交通手段は車にした。私は初めて見る新顔の運転手にハンドルを任せた。ただ一人、後部座席に揺られ、初めての前方の景色を、罪悪感と共に眺めた。
初めての馬車に乗って通ったシヴァ街の車道、夏祭りをやっていた公園、パトリックの教会、そしてまだ幼い頃、イーサンと共に暮らしたアパートが私の目じりを過ぎて行った。
車はあっという間にブラフマー街の入口に着いた。こんなに早かったかしら、と不思議に思ったが、私はすぐに運転手を止めた。
「ここでいい。後は歩く」
「しかし……」
不安そうな顔をする運転手に、「責任は私が持つ」と一言言い、私は外に出た。すぐに歩き出そうとしたが、ふと振り向いて「ありがとう」と呟いた。
「は？」
と、運転手は不思議そうな顔をしたが、私は再び歩き出した。
日も当たらずぬかるんだ地面が靴を汚した。私が最初の建てたあの掘立小屋の傍も通ったが、そこには新しく店が建てられており、壁にしていたブロックも、あの二人の女の子の姿もなくなっていた。
歩き続けたが、誰も特別私に興味を示さなかった。身なりは格段によかったが、歩きぶりだとか風格だとかに注目を受けることはなく、「めずらしい形だな」という意味の視線を二、三度受けるだけだった。
ふと、水の香りが鼻をくすぐった。甘く涼しく。彼女の元に近づいていると気づくと、私の荒れ果てた心に少しの青春の潤いが蘇った。疲れ切り、いつの間にかあまり動かなくなった脚が早まる。濁った瞳に、色が戻った。
夢の続きかのようにぼやけた井戸に、ようやくたどり着いた。まだ使われているのだろうか。私は身なりを正し、建物の正面玄関へ回った。扉を叩いてから開けて入ると、そこそこの広さの木造のホールが現れ

た。古ぼけた机やらソファやらが点々と置かれ、そこに女達がたむろし、爪を磨いたり煙草を蒸かしたりと銘々寛いでいた。彼女達は私を見ると一斉に立ち上がったが、何を思ったかすぐに座り込んでまた爪を弄り始めた。

　私は無関心な女達を潜り抜け、番台の前に立った。

「何の御用で、旦那」

　遣り手の老婆が帳簿を繰りながら私に言った。

「身請けがしたい」

　皺だらけの手がピタリと止まった。遣り手は眼鏡を掛けなおすと、ドキリとするほど鋭い目を私に向けた。

「どの子を」

「ここに、赤毛で顔に痘痕がある娘がいたはずだ」

「ああ」

　と、遣り手は小さな声で答えた。そしてしばらくじっと私を見つめた。

「旦那。あんたさんは恋人を金で買うんですかい？」

　ようやく発した遣り手の言葉に、私は黙った。何と答えようか、それさえ分からなかった。

「望みは薄いと思いなされ、旦那」

　ため息交じりのしわがれた声が続いた。

「あの子は今病身でございます。客からもらっちまってね、二つ。小部屋に寝かせてござえますだ。具合もかなり悪いそうで……」

「構わない」

　私は小さく呟いた。

「何だっていいんだ。頼む、会わせてくれ」

「アンナ・クリスティーンという名前でございます」

　遣り手が優しく言った。

「アンと呼ばれるのが好きでございました」

　アンの部屋の扉の前で、私は甘やかな緊張に包まれ、あの二度目の訪問を思い出していた。今度こそ絶対にアンを泣かせたりはしない。成功や富を誇ったり、得意になったりはしない。ただ俺の思いだけを語ろう。

　意を決して扉を開けた。錆びた蝶番が軋み、薄明るい電球の光が廊下へ漏れ出た。

　その時、凄まじいほどキツイ、尿の匂いが私の鼻を鋭く刺した。

　軋む床板を踏んで部屋に入った。アンモニアの刺激で涙が滲んだ。見渡すと、染みだらけの床にいくつものバケツが置かれ、そこからひどい異臭が漂っている。窓の傍の小卓には、古くなったパンが一切れと水のコップが一つ置かれている。その小卓の下に、薄い布団の乗ったベッドがあった。ベッドから聞こえる微かな呼吸音に釣られるように、私はそこへ近寄った。

「アン？」

　そう呼びかけ、ベッドの中を除き、そして絶句した。染みだらけのシーツに横たわる女はひどくやせ細り、体中に発疹を浮かべ、濁った瞳であらぬ方向を見つめていた。体中に尿の匂いを纏い、ひび割れた唇が必死に酸素を求め、うごめいていた。

　私はもう彼女の名前を呼ぶことができ

なかった。遣り手に言ったことも、扉の前で誓ったことも、静かにしぼんで小さくなっていった。ただ、再びの絶望と苦い挫折が口の中にせり上がってきた。

　こんな醜い女だったのか。俺が身も心も捧げたのは。

　目を覆うとした私の動作に気づいたのか、彼女の目がぐるりと私の方を向いた。

「坊や？」

　と、掠れた声が言った。

「こんなことって……」

　涙さえ流せず、私は呟いた。誰に向かってかは思い出せない。

「こんな女のために……こんな醜い女のために俺は人を騙して殺して、傷つけたんだ……。もうお終いだな。何もかも。もう夢は見れないんだな……」

「そうよ、夢じゃないのよ」

　掠れ声が私の声を止めた。怒りを込めて彼女を睨むと、彼女もまた病の目を怒りにゆがめた。

「あんたは夢なんか見ちゃいなかったのよ。夢なんて嘘でしかないのに、あんたはずっと追い掛け回したのね。今のあんたからは嫌な臭いがする。あの時、初めて会った男の子からはなかった匂いが」

「お前に俺の何が分かる！　お前なんかに！」

　ありったけのやるせなさで怒鳴り、私は床に崩れ座った。イーサンやアレック、エベレット、グレースの面影が、眼球に張る水面に霞んで思い出すこともできなくなった。手が震え、頬が震え、情けない涙がもう一度流れそうになったが、その時頬に何かザラザラしたものが当たった。

　彼女の瞳が私を見つめ、彼女の手が私の頬に触れていた。

「あたしを愛したことなんかなかったんだ。あんたは一度だって、あたしを愛したりしなかった」

　苦々しい思いに駆られ、私は彼女の首筋に息を荒く急き立てながら顔を寄せた。その時、尿とは違う、もっと冷たくツンとした匂いが鼻を刺した。

　その香りは、かつての私の母の物だった。そして、私とイーサンが幾度となく味わったもの。きっとアレックやエベレットにも漂っていただろう、死の香り。

「ロバート」

　名前を呼ぶ声を聞きながら、私は自分の胸の下にある、アンの胸を感じた。その上下する胸の動きが、染み通った。

「ずっと好きだったよ。俺が八歳の時からずっと。どんな贅沢に溺れても、どんな美女に囲まれても、どんな男に身を任せても、君に代わる人はいなかった」

「知ってたわ」

　私の唇が、次第に渇望を始めた。八歳の頃の潤いを取り戻したかった。

「なぜ会いに来てくれなかったの？　あなたがこうなるその前に、もっと早く会いに来てくれたら、今頃こうしてはいなかったのよ。あなたはただ、あたしから離れていくばかりだったわ。高い高い塔の上に登って、下を見ようともしなかったわ」

　馬鹿な恋だと思った。あの時、私も彼女も馬鹿で、馬鹿な夢を馬鹿な瞳に見出そうと、夢中でお互いを見つめた。馬鹿ではあったが、甘美だった。

アンが私をそっと愛撫した。その荒れた鑢のような掌でさえ心地よかった。私達はお互いを求めていた。

「これを」

彼女が胸ポケットから、きれいに折りたたんだ紙片を取り出した。受け取って開き、そして驚いた。あの若い日、十七の時プレゼントした、チョコレートの包み紙だった。

「あの時はごめんね。でも美味しかった。一欠けらずつ食べたの。食べた後でも甘い味が忘れられなくて、包み紙さえ捨てられなかった。それほど思っていたのよ。それほど」

そこで、アンの瞳が大きく開いた。何かに目覚めたような、何かに気づいたような瞳が、私を真っ直ぐとらえた。

「あなたって、美しくないのね。普通のあなたの顔をしてるのね。でもあなたは自分を奇麗だって思ってるのね。だからなのね、ロバート。だからあたしに会えなかったのね。愛してくれなかったのね」

呆然とする私を、彼女はそっと引き寄せた。暖かな息が私の唇に被さった。細く、今にも消え入りそうな呼吸の最後だった。

今思えば、彼女の私への恋は、あの一瞬で終わったのだろう。顔が近づき、唇が重ね合わされた時、彼女の中にまだ残っていた恋心が、消えかけのろうそくのように燃え上がった。この瞬間だけ、彼女の唇は甘く、私の唇でさえ清らかだった。どんな言葉でも飾れる、最初で最後の恋のキスだった。

唇を離すと、私はあることに気づいた。アンの瞳は、夢見る星のような瞳ではない。また、病の苦しみに濁った醜い瞳でもない。そこにはただ目がある。そしてアンという女性がいる。それだけだった。ずっと昔からそれだけだったんだ、と。

「やっとあたしを愛してくれたのね」

彼女の言葉に、私は頷いた。愛していたのだ。あの接吻の後、初めて愛したのだ。恋は終わり、ようやく愛が始まったのだ。

「愛してるよ、アン。間違いない。俺は君を愛したんだ」

「なら、一つだけあたしのお願いを聞いて」

愛の中の優しい目が、途端に強く引き締められた。女の目ではなかった。

「あたしには娘が一人いる。父親の分からない、まだ小さい子よ。ロバート。あたしを愛したのなら、どうかあの子をお願い。あたしが求めるのはこれだけよ」

私は優しく笑って頷いた。彼女の弱りきった顔に触れて、私は最後の時間を彼女と語らった。

「何か謝らなきゃいけないことが、まだある気がするんだ」

「何を」

「それを一つ一つ、思いだしたい。でも、そんな時間もうないのかな」

「いいのよ、ロバート。いいのよ。あたしたち、愛し合えたじゃない」

アンの手が震えた。もう時間だった。私は彼女に被さり、もう一度接吻した。甘い唇の代わりに、ひび割れた唇があった。私は自分の息を彼女に吹き込むように、深く深く唇を押し当てた。そっと唇を離すと、アンは最後の微笑と言葉を表した。

「あなたも、自分を愛せるといいわね」

（つづく）